

研究結果説明書

1. 事業の実施期間

令和 5年 4月 1日 ~ 令和 6年 3月 31日

2. CORE ネットワークの構成

(1) CORE ネットワークの名称：高知版 CORE 遠隔教育（ネットワーク）

(2) CORE ネットワークを構成する高等学校等

- | | |
|-------------------------|---------------------|
| ① 清水高等学校（受信校） | ② 宿毛高等学校（受信校・配信校） |
| ③ 宿毛工業高等学校（受信校・配信校） | ④ 中村高等学校（配信校） |
| ⑤ 中村高等学校西土佐分校（受信校） | ⑥ 幡多農業高等学校（受信校・配信校） |
| ⑦ 大方高等学校（受信校） | ⑧ 窪川高等学校（受信校） |
| ⑨ 四万十高等学校（受信校） | ⑩ 遠隔授業配信センター（配信校） |
| ⑪ 中村特別支援学校（準構成校として位置づけ） | |

※コンソーシアムの一員として、地域課題活動等に構成校とともに取り組むため、準構成校とする。

3. 調査研究結果の概要

(1) 「教科・科目充実型」の遠隔授業など ICT も活用した連携・協働の取組

(受信教室における体制の在り方に関する取組を含む。)

① 遠隔授業配信センターからの配信拠点型遠隔授業等に関して

令和3年度から取り組んできた遠隔授業に係る教育課程や校時程及び教科書（推奨教科書の採択）の共通化が一定進み、配信拠点型での遠隔授業（数学・理科・英語）の指導方法も確立できたことから、令和5年度は「情報Ⅰ」を加え、教科「情報」の免許外教科担任制度の解消に取り組んだ。「情報Ⅰ」は1クラス全員を対象とするため、受信教室における体制の在り方等について研究を行った。

「情報Ⅰ」では、高知県が導入している、チエル社の学習支援ツール「Inter CLASS Cloud」を常に活用することで、31.5型サブモニターに生徒の端末画面を鮮明に映し出したり、チャット機能を利用して、全体への注意事項や個別のヒントを出すことができたりするなど、対面授業における机間指導の代替になることが分かった。しかし、授業中にアクセスが途切れると再接続できなくなり、通信環境に左右されることがあったため、通信環境の改善が必要になった。また、後方の座席の生徒については、表情を見取ることができないことに加え、音声のタイムラグが大きくなり、生徒からの質問は支援教員を通じて受ける場面が何度もあるなど、生徒からの声の掛けにくさが顕著になったことから、支援教員との授業内容等の事前共有をより細かくする必要があったことも分かった。

② 構成校それぞれの強みを生かした学校相互型遠隔授業の実施

単位認定を伴う遠隔授業では、総合学科高校から小規模高校へ「書道Ⅰ」を、本校から分校へ「数学Ⅱ」を配信した。また、分野を限定した遠隔授業では、農業高校から小規模高校農業コースへ「農業と環境（次世代型農業分野）」を、工業高校からは、「情報Ⅰ」においてプログラミング等専門性の高い分野を配信した。

「書道Ⅰ」では、本県の遠隔教育システムに加えて、2人に1台の書画カメラを配備したことで、筆遣いや書き順等リアルタイムで細やかな指導ができるようになった。また、「数学Ⅱ」においても1人に1台書画カメラを使うことで、生徒のノートを直接観察することができ、つまずきに対して助言するなど、対面授業と同様の授業を行うことができた。

「情報Ⅰ」では、工業高校の情報技術科の有する専門力を、他教科への支援として生かす取組であった。専門性を持つ教員からの配信は、分野を限定しての配信であっても生徒の興味関心を高くし、免許外教科担任制度で「情報Ⅰ」を担当している受信校教員の負担を軽減させるとともに授業力も向上した。

農業では双方に専門教員が配置されているが、専門高校の設備や、自校にないスマート農業への取組等を学んだ。また、受信校間で相互に圃場を紹介し合った授業では、自校での農業の取組を発信する機会になったことに加え、自校では取り組んでいない栽培方法などを知り、生徒からは「自分たちの圃場でもやってみたい」などの意見が上がったことから農業への関心が高まったといえる。

いずれの取組からも専門教員からの配信によって生徒の興味関心が高まり、学びを深めることが確認できた。また、授業効果を高めるためには、生徒への声掛け等、受信校側での積極的な支援を必要とする場合があることも分かった。課題としては授業実施に際して、学校間で調整しなければならない項目が多くあり、人事異動に左右されず持続可能なものとするためには、システムとして運営する仕組みや調整する責任者が必要であり、それらは学校にはないため、どのようにして設けていくかについて検討が必要である。

③ 校長の管理監督のもと、教員免許を持たない者の受信教室への配置について

「農業と環境」の授業において、学校に常勤している実習助手が立ち会い、生徒と十分にコミュニケーションがとれていることなど、一定の条件が揃えば教員免許を持たない者でも受信側で立ち会うことが可能であることが分かった。しかし、本県の小規模校では、実習助手の配置も教員以外の人材の配置もない学校が多く、むしろ、教員の授業の持ち時間に入れる方が確実に配置できることが分かった。

④ 対面と遠隔教育を併用した高度な学びによる高等学校の特色化について

本事業では、構成校全体の教育力の向上及び、生徒の進路意識の醸成やキャリア発達の形成のために、遠隔教育システムを活用してキャリア教育講演会及び「地域課題

探究成果発表会」、対面又はオンラインでの大学生との交流などに取り組んできた。

キャリア教育講演会では、日本や世界で活躍する 20 代後半から 30 代の高知県出身者等をロールモデルとして紹介し、生徒が具体的な将来像を描けるように導いており、進路に対する視野の広がりや意欲の高まりを感想等から見取ることができた。

【キャリア教育講演会事後アンケート】

設問5 本日の講演会は、あなたの将来や進路を考えるうえで、ヒントや参考になりましたか？

4. そう思う 3. どちらかといえば、そう思う 2. どちらかといえば、そう思わない 1. そう思わない

令和5年度	第1回	第2回	第3回
平均値	3.4	3.6	3.4

大学生は高校生にとって、斜めの関係が築け、進路や勉強方法等の悩みに応えられ助言できる存在として重要である。大学生と交流した生徒の感想からは、進路や勉強の仕方を見直すきっかけとなったことや、交流した大学生のように挑戦できるようになりたいと思ったことなどが読み取れ、進学意欲の醸成等につながったと考えられる。早稲田大学の創立者の出身地域にある CORE 構成校は、自校の魅力化・特色化の一環として、毎年、早稲田大学との交流を実施している。当該校では CORE 事業（以下、「本事業」という。）で交流を持った「わせすく会」との面談を訪問スケジュールに学校が進んで組み込むなど、積極的な活用が見られた。

令和5年度の「地域課題探究成果発表会」は、構成校6校を含む県内14校を遠隔教育システムで結んで開催した。令和3年度は10グループの発表に対して、CORE構成校2校2グループが発表し、それ以外のほとんどが参観であった。令和5年度は発表する学校が5校6グループに増え、CORE構成校が中心となってきた。そのため、各校が他校の取組を知るとともに交流する機会となっている。

(2) 学校間連携を行うための運営体制に関する取組

遠隔授業推進プロジェクトチームの推進体制のもと、教育センター及び遠隔授業配信センター（以下、「配信センター」という。）が役割分担し、本事業に取り組んでいる。配信センターについては、令和5年度は6名の授業担当教員が配置されている。

学校間連携を円滑にするための事務取扱については、令和5年度の「情報Ⅰ」や学校相互型遠隔授業においても現行の内規（「遠隔授業配信に係る運用について」）で対応できるか研究した。必須科目である「情報Ⅰ」では受信側の支援教員にも専門性が必要であることが分かったため、年度内に改正する。

(3) 市町村、高等教育機関、産業界等との協働によるコンソーシアムを構築し、学校外の教育資源を活用した探究的な学びなどによる教育の高度化・多様化に関する取組

① 令和3年度に高知県西部の幡多・四万十地域（高知県宿毛市、土佐清水市、四万十市、四万十町、大月町、三原村及び黒潮町の区域をいう。）において、地元の産業界や市町村と県立学校からなる幡多・四万十地域教育協働コンソーシアムを設置した。

本コンソーシアムは、各地域の小学校、中学校、県立学校等の教育活動や人材育成に関する取組について相互理解を図るとともに、産業界をはじめ、学校外の地域資源を活用した教育の高度化・多様化の取組を協働して推進していくことで、地域の子どもたちへの教育と人材育成の充実を図ることを目的としており、令和5年度は3回の会議を開催した。

② 生徒の視点から学校の教育活動の評価を数値として捉えるために、三菱UFJリサーチ&コンサルティング（株）の「高校魅力化評価システム」を利用した。構成校10校のうち特別支援学校を除く9校では同システムを使い、「学習活動」「学習環境」「生徒の自己認識」「生徒の行動実績」の4つの観点を「主体性」「協働性」「探究性」「社会性」の4つの領域で高校と地域の活動を評価し、学年による違いなどを読み取った。

4. 調査研究の実績

(1) 実施日程

①遠隔授業関係

年 月	実施内容
5年4月	<p>5・6日：遠隔授業支援教員周知会</p> <p>11日：配信センター授業開始</p> <p>構成校のうち8校に、配信センターから遠隔授業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・清水高校：3年物理（4単位、嶺北高校との同時配信） ・宿毛高校：2年数学Ⅱ（4単位、大方高校との同時配信）、2年数学B（2単位、大方高校との同時配信） ・宿毛工業高校：3年コミュニケーション英語Ⅱ（4単位） ・西土佐分校：3年英語課題探究（2単位） ・幡多農業高校：2年数学Ⅰ（2単位）、2年数学A（1単位） ・大方高校：1年数学Ⅰ（3単位）、1年数学A（2単位）、2年数学Ⅱ（5単位、宿毛高校との同時配信）、2年数学B（2単位、宿毛高校との同時配信）、3年数学Ⅲ（6単位） ・窪川高校：2年論理・表現Ⅱ（2単位）、 1年情報Ⅰ（2単位・2講座） ・四万十高校：1年数学A（2単位）、2年数学Ⅱ（4単位）、3年英語表現Ⅱ（3単位）、1年情報Ⅰ（2単位）、 2年情報Ⅰ（2単位） <p>12日：単位認定を伴う学校相互型遠隔授業打合せ （中村高校、中村高校西土佐分校、宿毛高校）</p> <p>14日：単位認定を伴う学校相互型遠隔授業開始 宿毛高校から中村高校西土佐分校：書道Ⅰ（2単位） 中村高校本校から西土佐分校：数学Ⅱ（2単位）</p> <p>17日：分野を限定した学校相互型遠隔授業（農業と環境、幡多農業高校） 打合せ</p> <p>18日：分野を限定した学校相互型遠隔授業（情報Ⅰ、清水高校）打合せ</p> <p>24日：運営連絡会（配信センターと教育センター）</p> <p>26日：愛媛県総合教育センターの視察</p> <p>28日：CORE ハイクール・ネットワーク構想に係る第1回実証地域連絡協議会</p>
5月	<p>9日：第1回キャリア教育講演会（西村 梓氏：高知県青年国際交流機構理事シンガポール在住、在シンガポール(株)日立アジア・社内IT部門マネージャー）</p>

	<p>12日：分野を限定した学校相互型遠隔授業（情報Ⅰ、宿毛工業高校） 打合せ</p> <p><u>12日：公務員補習開始</u></p> <p>24日：「UTFR」オンラインミーティング（清水高校）</p> <p>26日：管理職対象遠隔授業説明会</p> <p>31日：職員連絡会（配信センター）</p>
6月	<p>6月上旬～6月末：構成校訪問ヒアリング（教育センター）</p> <p>6・7月：第1回【遠隔教育推進事業】令和5年度 遠隔授業アンケート</p> <p><u>6日：大学進学対策補習開始</u></p> <p>16日：分野を限定した学校相互型遠隔授業 （情報Ⅰ、宿毛工業高校・清水高校）打合せ</p> <p>23日：静岡県立浜松湖北高等学校の視察</p> <p>27・28日：第1回「UTFR」と清水高校生徒・清水中学校生徒の交流</p>
7月	<p>6日：鳥取県教育委員会の視察</p> <p><u>13日：第2回キャリア教育講演会（中村 友也氏：映像作家）</u></p> <p>27日：職員連絡会（配信センター）</p>
8月	<p>3日：CORE ハイクール・ネットワーク構想に係る第2回実証地域連絡協議会</p>
9月	<p>7日：「情報Ⅰ」の学校相互型遠隔授業開始（宿毛工業高校・清水高校） 9月8日～9月29日 計8時間</p> <p>8日：「農業と環境」の学校相互型遠隔授業開始 （幡多農業高校から四万十高校、窪川高校へ） 9月8日～11月17日 計8時間</p> <p><u>15日：危険物取扱者試験対策補習開始</u></p> <p>19日：第1回遠隔授業推進プロジェクトチーム会議</p> <p>22日：群馬県教育委員会の視察</p> <p>22日：「わせすく会」による宿毛高校生に対する啓発活動</p> <p>29日：第1回CORE遠隔教育評価委員会</p>
10月	<p>3日：大分県教育庁の視察</p> <p>16日：CORE 研究調査機関内田洋行教育総合研究所の訪問調査</p> <p>19日：運営連絡会（配信センターと教育センター）</p>
11月	<p>11・12月：第2回【遠隔教育推進事業】令和5年度遠隔授業アンケート</p> <p><u>1日：第3回キャリア教育講演会（山本 耕大氏：南極観測隊萌芽研究同行者・高知工科大学大学院生）</u></p> <p>6日：岐阜県教育委員会の視察</p> <p>13日：長野県総合教育センターからのオンライン照会</p>

	<p>14日：早稲田大学等生徒派遣事業（宿毛高校）</p> <p>15日：岡山県総合教育センター・岡山県教育庁の視察</p> <p>24日：CORE ハイスクール・ネットワーク構想に係る第3回実証地域連絡協議会</p> <p>28日：JICAの視察</p>
12月	<p>1日～26日：文部科学省「地域社会に根ざした高等学校の学校間連携・協働ネットワーク構築事業」Webアンケート調査</p> <p>12日：第2回CORE遠隔教育評価委員会及びCOREハイスクール・ネットワーク構想企画評価会議委員による指導・助言</p> <p>21日・22日：第2回「UTFR」と清水高校生徒・清水中学校生徒の交流</p>
6年1月	<p>10日：長野県総合教育センターの視察</p> <p>25日：次年度遠隔授業配信時間割案の投げかけ</p> <p>30日：CORE ハイスクール・ネットワーク構想に係る成果報告会</p> <p>31日：沖縄県教育庁の視察</p>
2月	<p>5日：「地域課題探究成果発表会」の開催</p> <p>13日：次年度遠隔授業配信時間割の決定</p> <p>15日：高等学校教育の在り方ワーキンググループ及び文部科学省他視察</p> <p>20・21日：長崎県教育委員会の視察</p>
3月	<p>1日：運営連絡会（配信センターと教育センター）</p>

②コンソーシアム関係

月	実施内容
5年4月	・（中村高等学校西土佐分校）第1回存続推進協議会部会の開催
5月	・（中村高等学校西土佐分校）第2回存続推進協議会部会の開催
6月	<p>・宿毛高等学校が、宿毛青年会議所の協力のもと、総合的な探究の学習の時間を活用し、地域PR動画を制作する取組を実施</p> <p>・（中村高等学校西土佐分校）第1回西土佐分校存続推進協議会及び第3回存続推進協議会部会の開催</p>
7月	<p>・第1回幡多・四万十地域教育協働コンソーシアム会議開催</p> <p>・（中村高等学校西土佐分校）第4回存続推進協議会部会の開催</p> <p>・（清水高等学校）土佐清水市地域コンソーシアム会議</p>
8月	・（中村高等学校西土佐分校）第5回存続推進協議会部会の開催
9月	<p>・（中村高等学校西土佐分校）第6回存続推進協議会部会の開催</p> <p>・（大方高等学校）第1回地域協働学習コンソーシアム会議</p>
10月	・（中村高等学校西土佐分校）第7回存続推進協議会部会の開催
11月	・（中村高等学校西土佐分校）第8回存続推進協議会部会の開催

12月	・第2回幡多・四万十地域教育協働コンソーシアム会議開催 ・(中村高等学校西土佐分校)第2回西土佐分校存続推進協議会及び第9回存続推進協議会部会の開催
6年1月	・第3回幡多・四万十地域教育協働コンソーシアム会議開催 ・(中村高等学校西土佐分校)第10回存続推進協議会部会の開催
2月	・(大方高等学校)第2回地域協働学習コンソーシアム会議

※学校における調査研究の実績のほか、コンソーシアムの活動等についても記入すること。

※遠隔授業システムを活用した教育課程外の取組については、アンダーラインを付すこと。

(2) 調査研究実績の説明

①「教科・科目充実型」の遠隔授業など ICT も活用した連携・協働の取組

(受信教室における体制の在り方に関する取組を含む。)

ア 配信拠点型遠隔授業等に関して

CORE 構成校に対する配信拠点型遠隔授業は、8校に対し、のべ20講座56単位実施した。県全体では16校に対し、のべ34講座、102単位配信した。このうち、2校同時配信を「数学Ⅱ」及び「数学B」、「物理」で実施し、必須科目である「情報Ⅰ」を除く1講座あたりの受講生徒の平均は2.9名であった。

(ア) 受講生徒アンケート結果

高1～高3の受講生徒(7月:57名、12月:54名)が回答

■ 4件法の結果

【設問1】～【設問5】:4 そう思う ～ | そう思わない

【設問6】(1)～(4):4 よくなるようになった ～ | 全くしない

【設問7】:4 ない ～ | ある

集計月	設問	57名 54名		教科								学年					
		全体		数		理		英		1		2		3			
		7月	12月	7月	12月	7月	12月	7月	12月	7月	12月	7月	12月	7月	12月		
設問1	話をしている先生・生徒(同時配信の場合)の声や指示など、音声は伝わった。	3.7	3.6	3.6	3.6	4.0	4.0	3.8	3.7	3.5	3.1	3.6	3.7	3.9	3.7		
設問2	授業配信の先生の表情や反応がよく分かり、やりとりもスムーズだった。	3.5	3.4	3.5	3.3	4.0	4.0	3.4	3.3	3.4	3.0	3.6	3.5	3.6	3.4		
設問3	先生・生徒(同時配信の場合)に気軽に回答(返事)や質問などができた(できる)と思う。	3.4	3.2	3.3	3.1	3.8	3.0	3.4	3.4	3.4	2.4	3.3	3.3	3.5	3.3		
設問4	私は、遠隔授業(習熟度別授業や専門教員(物理・生物)による授業、興味・関心のある選択授業)を受けて、学習意欲が高まっていると思う。	3.1	3.2	3.1	3.1	3.8	4.0	3.1	3.5	2.8	2.8	3.2	3.1	3.2	3.5		
設問5	遠隔授業は、それがない場合と比較すると自分にとってプラスだと思う。	3.4	3.4	3.3	3.2	3.8	4.0	3.6	3.5	2.9	2.9	3.4	3.3	3.7	3.6		
設問6(1)	予習や復習について	2.9	2.7	2.9	2.6	2.8	3.3	3.0	2.9	2.7	2.6	2.8	2.6	3.0	2.9		
設問6(2)	見通しを立てて計画的に学習することについて	2.9	2.7	2.9	2.6	3.4	3.3	3.1	2.9	2.7	2.5	2.9	2.7	3.2	2.9		
設問6(4)	自分の学習姿勢を振り返ることについて	2.8	2.9	2.8	2.7	3.0	3.3	3.1	3.1	2.5	2.5	2.8	2.8	3.0	3.1		
設問7	遠隔教育システム・機器について、改善して欲しいことがある。	3.3	3.2	3.4	3.2	3.6	4.0	3.2	2.9	3.3	2.9	3.3	3.1	3.3	3.3		

■設問6の項目

質問 遠隔授業を受けての自分の学習の仕方について教えてください。

(1) 予習や復習について

4 よくするようになった 3 するようになった 2 あまりしない 1 全くしない

※4・3を選んだ人へ:なぜ予習や復習をするようになり了吗か?[複数回答可]

- ア 遠隔授業は他の授業よりも難しいので、それについていくため。
- イ 遠隔授業は他の授業よりも速いので、それについていくため。
- ウ 自分の進路のために必要だから。
- エ 分からない問題をそのままにすると、ますます分からなくなるから。
- オ 以前からしていた。
- カ 興味や関心が出てきたから。
- キ 予習や復習をすれば効果があることが実感できたから。
- ク その他()

※2・1を選んだ人へ:なぜしないかについて、記述してください。

(2) 見通しを立てて計画的に学習することについて

4 よくするようになった 3 するようになった 2 あまりしない 1 全くしない

※4・3を選んだ人へ:なぜ計画的に学習できるようになりましたか?[複数回答可]

- ア 遠隔授業は他の授業よりも難しいので、それについていくため。
- イ 遠隔授業は他の授業よりも速いので、それについていくため。
- ウ 自分の進路のために必要だから。
- エ 分からない問題をそのままにすると、ますます分からなくなるから。
- オ 以前からしていた。
- カ 興味や関心が出てきたから。
- キ 計画的に学習すれば効果があることが実感できたから。
- ク その他()

※2・1を選んだ人へ:なぜしないかについて、記述してください。

(3) 質問6の(1)(2)で、「興味や関心が出てきたから」と答えた人は、その理由やきっかけについて、できるだけ具体的に書いてください。

(4) 自分の学習姿勢を振り返ることについて

4 よくするようになった 3 するようになった 2 あまりしない 1 全くしない

※4・3を選んだ人へ:なぜ学習姿勢を振り返るようになり了吗か?[複数回答可]

- ア 遠隔授業を配信している先生から、効果的に学習するための話があった。
- イ 自校で遠隔授業を支援している先生から、効果的に学習するため話があった。
- ウ 自校の先生(遠隔支援の先生を除く)や友だちにアドバイスをもらった。
- エ 同時配信と一緒に受けている、他校生徒の姿勢から気付いた。
- オ キャリア教育講演や進路学習の話を聞いたから。
- カ 以前からしていた。
- キ その他()

※2・1を選んだ人へ:なぜしないかについて、記述してください。

■設問6（4）自分の学習姿勢の振り返りについて

肯定的回答に対する選択項目の結果

なぜ学習姿勢を振り返るようになりましたか?[複数回答可]	7月回答	12月回答
ア 遠隔授業を配信している先生から、効果的に学習するための話があった。	25	23
イ 自校で遠隔授業を支援している先生から、効果的に学習するため話があった。	14	7
ウ 自校の先生(遠隔支援の先生を除く)や友だちにアドバイスをもらった。	7	13
エ 同時配信を一緒に受けている、他校生徒の姿勢から気付いた。	2	4
オ キャリア教育講演や進路学習の話聞いたから。	7	2
カ 以前からしていた。	19	19
キ その他()	4	6

肯定的回答に対する記述回答の変化

7月回答	12月回答
学習姿勢を振り返ることによって自分のできてないところ等が明確になるから。	先生がいい勉強法を教えてくれたから。
振り返りしてみて自分が分からないところを先生に聞いたりしていたから。	振り返りをしたら分からないところが分かったから。
したことがないから。	中間テストの点数がひどかったから。
無回答	すべての科目に対してしっかり取り組もうと思ったから。
今日何をしたかを振り返った。	振り返ることは大事だということが分かった。
無回答	テスト対策のため。
2年生のとき遠隔の先生とそういう話をしたから。	授業内でやるようになって、習慣化した。
積み重ねが大事だから。	効率の良い勉強法を探すため。
無回答	自分の課題を見つけるため。
無回答	授業についていけないと感じたため。
無回答	効率のいい勉強方法を見つけたいから。
追いつこうとがんばったから。	共通テストタイプの解き方を気にするようになった。
前向きになるから。	もっと知りたいと思ったから。

(イ) 受信校教員（遠隔支援教員）アンケート結果（7月：32名、12月：32名）

■ 4 件法の結果

【設問1】～【設問5】：4 そう思う ～ | そう思わない

【設問6】(1)～(4)：4 よくするようになった ～ | 全くしない

【設問7】：4 ない ～ | ある

※ただし、設問7の令和3年度は「4 そう思う～| そう思わない」で調査した。

集計月	設問	令和5年度		令和4年度		令和3年度	
		7月	12月	7月	12月	7月	12月
設問1	話をしている先生・生徒（同時配信の場合）の声や指示など、音声は適切であった。	3.7	3.8	3.9	3.8	3.7	3.7
設問2	配信教員の表情や反応がよく分かり、やり取りもスムーズだった。	3.6	3.6	3.8	3.9	3.3	3.4
設問3	生徒は、先生・生徒（同時配信の場合）に気軽に応答（返事）や質問などができた（できる）と思った。	3.3	3.2	3.5	3.5	3.5	3.5
設問4	生徒は遠隔授業（習熟度別授業や専門教員（物理・生物）による授業、興味・関心のある選択授業）を受けて、学習意欲が高まっていると思った。	3.3	3.3	3.4	3.4	3.4	3.3
設問5	遠隔授業は、それがいい場合と比較すると生徒にとってプラスだと思った。	3.2	3.3	3.4	3.6	3.6	3.5
設問6	遠隔授業を受けて、生徒の学習への取り組み姿勢に変化がありましたか。	3.0	2.9	3.1	3.0		
設問7	遠隔教育システム・機器について、改善して欲しいことがある。	3.0	3.2	3.4	3.3	1.7	1.4

■ 自由記述の結果

設問6 遠隔授業を受けて、生徒の学習への取組姿勢に変化がありましたか。

	7月回答	12月回答
1	遠隔での補習を受講するなど、前向きな取り組みが見られるから。	少人数で授業者とのやり取りが頻繁であるため、意欲をもって授業に取り組んでいる。
2	授業外での課題への取り組みにより、学習習慣の定着につながっている。	現状に甘んじることなく、より高い目標をクリアすべく、努力を重ねている。授業や課題、テストで求められるハードルが上がったことによると思われる。
3	授業中よく寝ている生徒があまり寝なくなった。	自学自習をするようになった。
4	自学自習の時間が増えている。	自学している姿が見られた。
5	英語に少しでも興味を持ち、昨年度よりも学習意欲が上がっていると思われる。	休み時間を利用して、遠隔授業の取り組みをしていた。遠隔授業のおかげで、英語に対する興味関心が高まったから。
6	他の授業と比較しても、取組姿勢に関しては差異はない。	課題の提出や、小テストへの取り組み姿勢への積極性的の変化が見て取れた。
7	大きく変化したということではないと思いますが、受験に向けてやらなければいけないことを少しずつ始めたという感じでしょうか。	先生との密接なやり取りや他校の生徒とのかかわりの中で、本人の勉強に対する意識も高まり、課題に対する取り組みや受験勉強に生かされていると感じている。
8	自覚が芽生えた。	徐々に学習に前向きになっている。担当の先生の親身な声かけや訪問のおかげである。
9	生徒の学習態度を見ていると、宿題を忘れていたりテスト勉強が十分できていなさそうだったりするから。	「課題やってない」「忘れた」というような声を聞かなくなった。進路に関する事で何か心境の変化があったのかもしれない。
10	マンツーマン授業なので、初めから生徒はしっかりと取り組んでいる。	学習意欲や家庭学習の時間が増えたと思う。
11	主体的に学ぶ姿勢が強化した。簡単に教師をあてにせず、自力で問題に向かっている。	生徒が慣れてきたことに加えて、先生が色々工夫をしてくださる熱意を感じ、取り組み姿勢が向上しているように思う。
12	遠隔以外でこの授業を受けていないので、比較できない。	小テストや単元テストなどに向けて、家庭学習をしている様子が見られる。
13	生徒同士で教え合うなど、前向きに授業を受けている。	模試対策などを考えながら取り組んでいる様子が見られる。
14	自由に自分の意見が言える雰囲気なので。	先生からの声掛けが授業中に何度もあるので、対話をしながらの授業だから。

(ウ) 配信教員アンケート結果（7月：12名、12月：11名）

■ 4件法の結果

【設問1】～【設問5】：4 そう思う ～ | そう思わない

【設問6】～【設問5】：4 あった ～ | なかった

【設問7】～【設問5】：4 ない っ～ | ある

集計月	設問	令和5年度	
		7月	12月
設問1	私の声や指示は、生徒に適切に伝わっていると思う。	3.3	3.2
設問2	私の表情や反応は、生徒によくわかり、やり取りはスムーズだと思う。	3.1	3.3
設問3	生徒は気軽に応答や質問などができていると思う。	3.0	3.0
設問4	生徒は遠隔授業を受けて、学習意欲が高まっていると思う。	2.9	3.0
設問5	遠隔授業は、それがない場合と比較すると生徒にとってプラスだと思う。	3.2	3.4
設問6	遠隔授業をすることで、授業改善のヒントがあった。	3.4	3.5
設問7	遠隔教育システム・機器について、改善して欲しいことがある。	2.5	2.1

■ 自由記述の結果

質問6 遠隔授業をすることで、授業改善のヒントがあった。

	7月回答	12月回答
1	教材の工夫。教材や課題、授業中の生徒の意見共有資料などをデジタル化することで、成績や評価をつける際の時短につながっている。	デジタルデータにすることで、分析や教材の改善修正が容易になった。
2	授業内容・時間配分	時間的に制限があり、放課後や土曜補習を利用できない中、生徒に合わせ、より効率的に効果的に計画的に授業を組み立てること。
3	画面を通して、支持することの難しさや、画面を通してほめることの難しさを感じ、わかりやすい授業をつくることをあらためて考える機会となった。	わかりやすく教えることの言葉の大切さや、ほめることをどのように伝えるべきかとか、生徒の様子をタイムリーにみて感じ取り、的確に言葉かけすること等、あらためて見直せた。
4	全員が必要な情報を確実に共有できるようにするため、ワークシートと画面への提示内容を一致させたり、Googleクラスルームのストリームで連絡したり、するなど情報伝達を工夫するように心がけている。	遠隔授業では対面授業に比べ「黒板」が狭いので、配付プリントや説明資料を少なくしなければならない。そのため内容を精選することにつながった。
5	個人が書いた英作文をジャムボードを使って全体で共有し、改善点を教え合う。本人の了解を得て、生徒が書いたものを他校の生徒も閲覧し、感想を書く活動。モデル会話文を元にオリジナルの会話文をGoogleジャムボードで共同編集。ドキュメントを使って交換日記等。	言語活動をさせるためにICTを活用すること。学び合いの場をICTを使って作る。クラスルームを使うこと。
6	遠隔授業で新課程の意図する英語の授業を行うことは難しいが、ICTを使うことで教材作成のヒントをもらった。	ICTの利用について考え、発表などの際に気軽に利用できたこと。
7	形式が全く違うので、通常の授業の参考にはならない。	ICTの使い方

イ 学校相互型遠隔授業の実施について

農業と情報の教科において、専門高校から分野を限定した遠隔授業を配信した。また、総合学科の高校から芸術教科（書道）、本校から分校へ普通教科（数学）の遠隔授業を配信するなど、構成校それぞれの強みを生かした学校相互型遠隔授業について研究した。

(7) 機器環境について

それぞれの教科に適したICT機器を使うことで、指導の質が高まることが明らかになった。

【農業】配信校：移動式遠隔教育システム

受信校：移動式遠隔教育システム、1人1台端末

【情報】配信校：生徒の1人1台端末画面が共有できる授業支援システム

受信校：1人1台端末

【書道】配信校：書画カメラ、ペンタブレット

受信校：1人1台端末、生徒2人に1台の書画カメラ

(4) 学校相互型遠隔授業における受信校側の遠隔支援教員の資質や役割について

学校相互型遠隔授業において、専門教員からの授業効果を高めるためには、生徒への声掛け等、受信校側での積極的な支援を必要とする場合があることがわかった。

- ・「書道Ⅰ」での受信教員の聞き取りからは、「配信教員が何を求め、どうすればやり易いのかをよく考える。」という発言があった。配信教員からは「受信教員の協力が的確であり、遠隔でも対面とかわらない指導を実践できる。」という発言があったことから、配信教員の想定している授業を、受信側で実現できることが重要であることが分かった。
- ・「情報Ⅰ」の遠隔授業では、配信教員から「非常にいい連携ができた。受信側教員が主体的に動いてくれたことで、専門教員が指導する効果が高まったのではないだろうか。」という感想があった。また、遠隔授業を契機として受信教員が「情報Ⅰ」の指導の幅を広げた。

(ウ) 専門教員からの遠隔授業を受けた生徒の変容や評価について

専門教員による配信によって生徒の興味関心が高まり、学びが深まることが分かった。

- ・「書道Ⅰ」では、52時間の授業のうち遠隔授業が36時間、対面授業が16時間であり、他教科に比べて多くの回数の対面授業を必要としたが、通常の対面授業で実施していることと同等の内容を実践できた。色を使うことや布バックづくりなど、生徒の個性や表現力を生かすことが出来る教材を選ぶことで生徒の表現の幅が広がった。評価については、60インチの大型モニ

ターや1人1台端末、2人で1台の書画カメラ等のICT機器により、対面と差を感じることなく見取ることができるという意見があった。

- ・「情報Ⅰ」において、プログラミングは中学生の時にも学習しているが、専門教員の指導により、より複雑なプログラミングに挑戦し、授業が進むにつれて学びを深めていく様子を見取ることができた。
- ・農業では双方に専門教員が配置されていたが、専門高校の設備や、自校にないスマート農業への取組等を学ぶことで農業に対する生徒の興味が深まった。また、学校相互に圃場を紹介し合った授業では、農業の取組を発信する機会になったことに加え、自校では取り組んでいない栽培方法などを知り、生徒から「自分たちの圃場でもやってみたい。」などの記述があったことから農業への意欲が高まったといえる。

ウ 校長の管理監督のもと、教員免許を持たない者の受信教室への配置について

学校相互型遠隔授業での分野を限定した授業配信（農業と環境）において、農業の実習助手を受信教室に配置した。学校に常勤しており、生徒と十分にコミュニケーションをとることができていたことから、一定の条件が整えば教員免許を持たない者であっても遠隔授業に立ち会うことができることが分かった。しかし、実習助手が配置されていない小規模校も多く、そのような学校では学習支援員の雇用さえも地域の人材を確保することが難しい。

このように、CORE 構成校の小規模校では、教員以外の人材を配置することが難しく、教員も配置が限られ、遠隔授業の実施に制限が生じることが明らかになった。

エ 対面と遠隔教育を併用した高度な学びによる高等学校の特色化について

(ア) キャリア教育講演会

<令和3～5年度実績>

令和3年度

第1回：「まんまる高知」共同代表、「龍馬 frogs」実行委員会メンバー

第2回：ニューヨーク在住ファッションデザイナー

パラリンピック開会式の衣装デザイン担当

第3回：青年海外協力隊員（ウガンダ小学校教員）

令和4年度

第1回：林業女子会@高知 代表

第2回：STEAM 教育者・ジャズピアニスト

四万十高校・大正中学校合同バンドとジャズセッション

第3回：檮原病院 医師

令和5年度

第1回：日立アジア社内 IT 部門マネージャー（在シンガポール）

高知県青年国際交流機構理事

第2回：映像作家、仁淀川流域6市町村 PR 動画作成

日本国際観光映像祭 旅ムービー部門 最優秀賞受賞

第3回：高知工科大学大学院生、第64次南極地域観測隊萌芽研究同行者

(イ) 大学生との交流事業

<令和3～5年度実績>

清水高校（UTFR）：対面7回、オンライン1回

宿毛高校（わせすく会）：対面4回、オンライン1回

（内1回は『早稲田大学等生徒派遣事業』による大学構内での交流）

西土佐分校（RunDo!）：対面1回、オンライン1回

(ウ) 地域課題探究成果発表会

<令和3～5年度実績>

CORE 構成校の発表グループ数

令和3年度：2校2グループ

令和4年度：2校3グループ

令和5年度：5校6グループ

② 学校間連携を行うための運営体制に関する取組

ア 本県の推進体制及び教育センターの運営体制について

本県では、令和元年度に、教育次長をリーダーとして担当各課長等からなる遠隔授業推進プロジェクトチーム及び、実務担当者からなる作業チームを設置している。このチームを生かして、遠隔教育ネットワークの構築、円滑なシステム運用・保守管理とともに、遠隔授業を担当する専任教員の配置、教育課程の編成、教科書の採択、著作権対応、システム導入校での遠隔授業内規等遠隔授業に係る全ての事項について、一体的に取り組んできた。本事業においては、このチーム体制が推進力となって、学校間連携及び事務局と学校との連携、教育委員会内の連携を進めることができた。

教育センターは、次世代型教育推進部長のもと、実務を担当するチーフと指導主事3名体制で、遠隔教育全般に係る運営・企画・調整及び予算管理、遠隔教育のシステムの構築・管理運営等遠隔授業受信校と県教育委員会事務局各課をつなぐハブ的役割を所管業務としている。

イ 遠隔授業配信センターの運営体制について

- ・令和5年度は、配信センターに遠隔授業担当の専任教員7名を配置し、そのうち、管理職員として副校長・教頭、主幹教諭を配置している。また、数学、理科、英語の時間講師各1名とALT1名を配置している。
- ・専任教員は、配信センターに所属している。また、配信先高校教員としての勤務も命じられ、人事異動通知書に兼務発令を明記しており、授業や業務を支障なく行うことができている。
- ・受信校ごとの連絡調整担当を決めて、学校行事等による時間割変更など日常的な学校との連絡対応を円滑に実施している。

ウ 学校間連携を円滑にするための事務取扱について

本県では、遠隔授業に関する事務取扱について、配信センターと受信校側との共通化を図るために、内規「遠隔授業配信に係る運用について」を令和2年3月30日付けで策定し、令和3年3月10日に一部改正した。本年度の「情報Ⅰ」の授業や学校相互型遠隔授業においても現行の内容で対応できるか研究した。必修修科目である「情報Ⅰ」では受信側の支援教員にも専門性が一定必要であることが分かった。次年度に向け内規の改正を行い、さらに円滑な運営・学校間の連携を進めていく。また、今後も各校からの情報収集を恒常的に行い、必要に応じて改正する。

エ 学校相互型授業に係る運営体制について

- ・本県では平成27年度から学校相互型遠隔授業の取組を始めている。しかし、その際には、内規やマニュアルなどがそれぞれの学校間で決められており、県内全体へ遠隔授業に対する理解が進まなかった。このことから、本事業の学校相互型においても、県統一の内規で対応することが必要であり、県内全域に遠隔教育を推進するうえで、県統一の内規が有効であることが分かった。
- ・配信校・受信校の管理職や授業担当者、それぞれの間で連絡担当を決めて、円滑な運営を行った。
- ・内規は遠隔授業に関わる学校、教員、教育委員会事務局の共通理解のために必須のものである。単位認定を伴う遠隔授業を初めて実施する学校には、前年度のうちに内規の説明を行い、年度当初に遠隔支援教員に対して遠隔教育システムの機器操作講習を含めた周知会を実施した。本年度はさらに管理職を対象とした遠隔授業説明会を行った。

- ③ 市町村、高等教育機関、産業界等との協働によるコンソーシアムを構築し、学校外の教育資源を活用した探究的な学びなどによる教育の高度化・多様化に関する取組

第1回幡多・四万十地域教育協働コンソーシアム会議（以下「コンソーシアム会議」という。）では、学校と地域産業とが連携した取組として中村高等学校西土佐分校、四万十町、中村特別支援学校の実践発表を行った。中村高等学校西土佐分校の発表では、学校と地域とで構成された西土佐分校コンソーシアム会議（存続推進協議会部会）の中で、生徒が地域を知る取組について検討し、実施された取組として、小・中・高が連携した農作物収穫体験や西土佐地域の資源を活用した川漁師体験活動についての報告があった。次に、四万十町の発表では、町内にある窪川高等学校と四万十高等学校2校の生徒を対象にした、町内合同企業説明会を開催したことについての報告があった。その説明会では、町内の事業所が、生徒に向けて業界の紹介や仕事の魅力などを説明し、生徒がそれを聞く中で、地域産業を知るとともに、働くことの意義を考える機会となったことを報告した。中村特別支援学校の発表では、多くの生徒が、地元で就職することから、地元就職に向けて取り組んでいる生徒の様子を紹介するとともに、生徒の取組の様子をより広く地域の方々に知ってもらうためにも、地元産業と学校とのさらなる連携・協働の必要性を感じたことが報告された。現在、中村特別支援学校では、コンソーシアム会議を通じて知り合うことのできた事業所と生徒の実習受入れについて、協議を進めている。

実践発表の後、6名程度で3つのグループを編成し、「生徒が地域の魅力や産業について理解を深めることができる具体的な取組」について意見交換を行った。意見では、小学校の「ふるさと教育」、中学校の「職業体験」、高校の「探究活動」など、歴史や文化、産業を知ること、深く地域を知る取組が実践されていることが挙げられた。その一方で、「小中高それぞれの取組がなされていても、学校間の連携が図られていないため、取組の積み上げがない」ことが、課題として挙げられた。また、「地域に魅力を感じないと、将来地元に戻ってこない。そのため、地元での良い体験が、地元で魅力を感じるきっかけになるのではないか」など、地元で愛着を持つための地域の関わり方に関する意見、「幡多地域全体で行動を起こすべき」、「幡多・四万十はひとつ」など、今後の取組の方向性を示唆する意見も出された。

第2回コンソーシアム会議では、第1回会議の意見交換での意見を受けて、テーマを「地域を知り、地域に愛着を持ってもらうためには、どのような取組ができるのか」として、さらに深掘りを行い、生徒が地域に愛着を持つための具体的な取組について意見交換を行った。意見交換では、「地域課題の解決に向けた手立てを考えるアイデアソンを実施してはどうか」、「幡多・四万十地域全体の取組として高校間の連携や小中高の学校間連携、また地域の産業を知る場を設定してはどうか」、「幡多・四万十地域の高校生が、学校間の交流を図る取組をしてはどうか」など、学校と地域との連携・協働に向けた積極的な意見が出された。

第3回コンソーシアム会議では、「3年間の取組のまとめ」、「令和6年度幡多・四万十

地域教育協働コンソーシアム取組」、「令和6年度以降の幡多・四万十地域教育協働コンソーシアム会議の在り方」の3点について協議した。

1点目の「3年間の取組のまとめ」では、本コンソーシアム会議において、取組の3つの柱である「①地域における教育や人材育成における相互理解の促進」、「②地域の県立学校と産業界、市町村等が協働した取組の推進」「③高知版 CORE 遠隔教育ネットワーク構想のうち、学校外の地域資源を活用した探究的な学びの推進による教育の高度化・多様化の推進」についてのまとめを行った。①については、コンソーシアム会議において、学校と地域とが連携・協働した取組の事例発表を行った後、グループに分かれて意見交換を実施したことで、各委員がその取組に対する考えや思いを共有することができた。意見交換では、「校種を超えた発表や企業の合同説明会を大々的に実施するのも手ではないか」、「幡多地域外に出たとしても、いろいろなスキルを身につけて、帰ってきてもらって、幡多地区全体を盛り上げる担い手となってもらいたい」など、連携・協働に向けた具体的な取組に関する意見や、幡多・四万十地域の児童、生徒への思いが共有されたことにより、各地域における教育や人材育成に関する相互理解が深められる機会となった。②については、宿毛高校が、宿毛青年会議所の協力のもと地元PR動画を制作したことや、中村特別支援学校が、本コンソーシアムで知り合うことができた事業所と、生徒の実習受入れに向けた協議を進めていることなど、学校と地域とが連携・協働することで、生徒の地域における活躍の場が広がり「地域を知る」、「地域産業の魅力を知る」取組の充実が図られた。③については、コンソーシアム会議の中で、小グループで意見交換を行い、学校間連携や地域の産業を知る場を設定するといった提案など、教育の高度化、多様化に向けた意見が出された。

2点目として、第2回会議の意見交換で出された意見をもとに、令和6年度以降のコンソーシアム会議における取組について、事務局から提案を行った。具体的には「地域課題の解決に向けた手立てを考えるアイデアソンを、各学校で実施する」、「幡多・四万十地域を知る取組として、学校間で連携した探究活動を実施する」、「学校間連携、地域産業を知るための場を設定する」ことを提案した。

3点目として、令和6年度以降の本会議の在り方について、各学校で行われる探究学習を系統立てて取組を進めながら、人材育成ができるように、次年度以降も引き続きコンソーシアム会議を実施することが了承された。コンソーシアム会議は、年2回程度実施することとし、具体的な取組内容などを検討するため、コンソーシアム会議構成校の職員から選出した作業部会を設置することとした。

また、学校の教育活動を生徒視点から、数値として可視化するために、三菱UFJリサーチ&コンサルティング（株）の「高校魅力化評価システム」を利用しており、7月にアンケートを実施した。12月には、その結果について読み取り、それぞれの高校で活用するため、同システムについての研修会を対面で開催した。生徒の変容を読み取るための評価指標として、同システムで用意されている「学習活動」「学習環境」「生徒の自己認識」「生徒の行動実績」の4つの観点を「主体性」「協働性」「探究性」

「社会性」という4つの領域で数値として可視化した中の「社会性」に絞り、経年変化や学年による違いなどを読み取った。

本年度の結果として、「学習活動」は9校中6校、「学習環境」は9校中8校、「生徒の自己認識」は9校中7校、「生徒の行動実績」は全ての学校で昨年度より高い数値を示した。また、構成校9校の平均と全国平均との比較においては、全ての項目について構成校9校の平均が高いという結果が得られている。

【高校魅力化評価システム 「社会性」】

(単位：%)

	学習活動		学習環境		生徒の自己認識		生徒の行動実績	
	R4	R5	R4	R5	R4	R5	R4	R5
窪川	70.1	69.8	82.1	84.0	63.4	66.5	50.7	67.5
四万十	72.0	72.5	87.5	79.5	67.4	61.5	55.9	63.8
大方	78.4	75.0	82.7	85.0	68.8	69.0	60.1	67.3
幡多農	54.5	67.3	81.4	84.0	68.1	70.8	51.2	62.5
中村	51.9	68.3	74.8	84.0	69.5	75.0	42.8	69.3
西土佐	60.3	70.0	78.6	79.0	61.5	63.0	46.0	75.0
宿毛工	49.3	54.0	73.7	80.8	65.3	72.5	47.0	63.8
宿毛	80.2	75.3	80.3	85.8	63.1	72.3	49.0	66.5
清水	67.9	73.8	78.0	79.0	68.1	65.0	49.4	61.0
構成校 9校平均	58.5	69.5	77.8	82.3	67.3	68.4	47.8	66.3
全国	52.8	47.9	70.6	63.7	64.4	62.5	43.4	40.0

5. 遠隔授業の実施状況

【配信拠点型遠隔授業】

受信校	教科	科目	遠隔授業を実施した授業回数（対面授業を除く。）
清水高校	理科	物理	94
宿毛高校	数学	数学Ⅱ	100
	数学	数学B	46
宿毛工業高校	外国語	コミュニケーション英語Ⅱ	86
中村高校西土佐分校	外国語	英語課題探究	44
幡多農業高校	数学	数学Ⅰ	48
	数学	数学A	19
大方高校	数学	数学Ⅰ	85
	数学	数学Ⅱ	133
	数学	数学Ⅲ	146
	数学	数学A	48
	数学	数学B	54
窪川高校	外国語	論理・表現Ⅱ	51
	情報	情報Ⅰ	50
	情報	情報Ⅰ	50
四万十高校	数学	数学A	54
	数学	数学Ⅱ	109
	外国語	英語表現Ⅱ	70
	情報	情報Ⅰ	53
	情報	情報Ⅰ	54

【学校相互型遠隔授業】

配信校	受信校	教科	科目	遠隔授業を実施した授業回数（対面授業を除く。）
宿毛工業高校	清水高校	情報	情報Ⅰ	7（2講座を1つにして実施）
中村高校	中村高校西土佐分校	数学	数学Ⅱ	41
宿毛高校	中村高校西土佐分校	芸術	書道Ⅰ	36
幡多農業高校	窪川高校	農業	農業と環境	8
幡多農業高校	四万十高校	農業	農業と環境	8

6. 調査研究の進捗状況、成果、評価（※目標設定シート（別紙様式1 別添4）を添付）

（1）遠隔授業について

① 進捗状況

単位認定を伴う遠隔授業の講座数は、配信センターから8校に対しのとおり20講座、学校相互型では「数学Ⅱ」、「書道Ⅰ」の2講座実施した。また、工業高校から小規模高校へ「情報Ⅰ」、農業高校から普通科小規模高校2校（同時配信）の農業コースへ「農業と環境」の分野を限定した遠隔授業を配信し、併せて、見込み通り24講座実施した。

学校のニーズに応じた遠隔授業の週あたり時間数の全校計については、見込みの63時間に対して、配信拠点型20講座56時間、学校相互型2講座4時間の合計60時間の実施となった。配信拠点型では数学・理科・英語・情報の4教科、学校相互型では数学・書道の2教科で学校のニーズに合わせた科目を開設している。学校相互型の「農業と環境」及び「情報Ⅰ」は単位認定に至らない分野限定配信となったため、週あたり時間数が変更となったが、ニーズに合わせた遠隔授業は実施できた。

学校のニーズに応じた遠隔授業・補習の活用校数は、見込みのとおり「9校」全校で実施できた。公務員試験対策補習はニーズが非常に高く、全学年対象の前期では9校47名、1・2年生対象の後期では7校35名の生徒が受講した。

免許外教科担任制度の活用については、令和5年度17件であり、目標値の6件に届いていない。構成校における本年度の免許外教科担任制度は、地歴・公民・情報・書道で活用されており、単位認定初年度ということからか、「書道」の免許外教科担任制度申請もあった。配信センターから「情報Ⅰ」を受信している2校では、情報での活用はなく減少したが、人事異動によって遠隔授業受信校以外での情報や地歴・公民での活用件数が増加した。令和6年度は「情報Ⅰ」の受信校が増加することに加え、2年目となる単位認定を伴う学校相互型遠隔授業「書道Ⅰ」によって、免許外教科担任制度の活用件数が減少する見込みである。

② 成果

学びの基礎診断等により把握する生徒の学力の定着・向上の状況は、目標値の70%以上増加に対し18%の増加で昨年度と同じであり、目標設定の甘さが反省点である。CORE構成校の1・2年生の遠隔授業と遠隔補習の受講生徒は、数学・英語で121名（令和4年度23名）であり、このうち各学年の第1回基礎力診断テストのB1以上は38名（全体の31.4%）、第2回のB1以上は、45名（37.1%）に増加したが、該当の生徒数を比較した増加率は38名から45名と18%の増加であった。教科別では、数学が25名から28名で12%の増加、英語が13名から17名で31%増加している。

遠隔授業・補習受講生徒のうち、現役で国公立大学を受験した生徒は16名であり、目標値20名に届かなかった。このうち、12名（高知大学6、高知工科大学3、徳島大学1、公立鳥取環境大2）が合格した。

CORE 構成校地域の中学生のうち、構成校へ入学した中学校卒業生の割合は、令和3年度 717 人中 542 人（76%）、令和4年度 723 人中 554 人（77%）、令和5年度 649 人中 502 人（77%）であり、地域内の高校に進学する中学生の割合を維持することができている。

（2）コンソーシアム事業について

コンソーシアム会議では、学校と地域とが連携した取組を実践発表し、その後、小グループに分かれて意見交換を実施した。各委員が、その取組に対する思いや意見などを共有することで、各地域における教育や人材育成に関する相互理解を深める機会とした。第1回の意見交換では、「生徒が、地域の魅力や産業について理解を深めることができる具体的な取組」というテーマで、協議した。委員からは、小中高で地域を知る取組は実施されているが、取組の積み上げがないことや、地域産業を知るための連携の必要性について意見があった。第2回コンソーシアム会議では、第1回会議の意見交換で出された意見を深掘りし、「地域を知り、地域に愛着を持ってもらう」ためには、どのような取組ができるのか、意見交換を行った。委員から、学校間連携や地域産業を知るための場を設定してはどうかといった積極的な意見が出た。第3回コンソーシアム会議では、第2回会議で出された意見を受けて、県教育委員会事務局が提案した取組を実現していくため、本コンソーシアム会議を次年度も継続し、作業部会を設置して、その取組を検討・実行していくというコンセンサスが得られたことは成果である。

「高校魅力化評価システム」の結果では、前述のとおり、「学習活動」は9校中6校、「学習環境」は9校中8校、「生徒の自己認識」は9校中7校、「生徒の行動実績」は9校中9校が昨年度より高い数値を示した。また、構成校9校の平均と全国平均との比較においては、全ての項目について構成校9校の平均が高いという結果が得られた。この結果については、新型コロナウイルス感染症が、5類へ移行されたことにより、生徒の活動の幅が広がったこともあるが、学校と地域との連携が進んできたことも要因の一つと考えられる。12月には、各校の取組の振り返りや今後の取組の充実につなげるために、高校魅力化の必要性と高校魅力化評価システムを活用したアンケートの読み解きのポイントを理解する高校魅力化評価システム活用方法研修会を実施した。現在、それをもとに各校において探究学習の改善に向けて取組を進めている。

（3）評価

① 本県のCORE遠隔教育評価委員からの評価

- ・最終評価「A」
- ・最初に求めていた目標から、目指すレベルが上がってしまった。しかし、最初に立てた目標は十分に達成出来ている。達成した部分から課題が明らかになった。
- ・方向性に関しては、高知県として、独自に考えなくてはいけない項目があり、教育委員会が取り組む課題は大きいかもしれないが、早急に直面しているものが幾つ

かある。今までやってきたことでクリアできる部分が蓄積されているので、方向性やビジョンをみんなで共有して対応していけばよい。

② COREハイスクール・ネットワーク構想企画評価会議委員からの評価

- ・全体の成果としてもいいと思った点は、入学者の割合がこの3年間、伸び続けているというところだ。もちろんCOREの取組だけではないと思うが、いろいろな取組をやる中で、中高生やその保護者にとっても魅力のある学校になっているというところは、評価できる点ではないか。
- ・高知県の高校のどこに入っても全ての生徒が高知県の高校教育をしっかりと享受できる環境をつくっていきたいということで「大高知高等学校」と申し上げた。今この「大高知高等学校」は必ずしも一方通行ではなく、別の学校の学びや大規模校の学びにも還元できる。よりよい高校教育を実現していってくれることを心から願っている。
- ・学校相互型遠隔授業の科目「農業と環境」の授業の生徒の感想に、「近いようで何にも知らなかったので勉強になった」「話し合いをもっとしたいと思った」「交流をしたい」という感想があるが、この感想に対して、どうしたのかということが、生徒のニーズをしっかりと受け止めて応えていくことだと思う。お膳立てを教育委員会や先生がする必要はなく、生徒にどんな方法があるのかを考えさせていくということが、自律した学習者を育てる上でとても大事なことなのではないか。

7. 次年度以降の課題及び改善点

(1) 遠隔授業について

生徒のニーズに応じた遠隔授業を配信センターから配信していくとともに、今後の高知県の教育の姿を見据え下記の取組について、次年度以降、遠隔授業推進プロジェクトチームを中心に取組を検討していく。

- ① 配信センターから普通科高校への遠隔授業を、現在の数学・英語・理科に加えて、地歴公民、国語、書道を配信することで、生徒ニーズの幅の拡大による進路保障と免許外指導担当教員削減を目指す。
- ② 配信センターからの遠隔授業を、定時制昼間部の対象校の拡充を目指すとともに、通信制課程の生徒を対象とした授業配信等を行うことを目指す。
- ③ 専門高校の教育課程上にはあるが、習熟度別対応が必要な教科・科目を、配信センターまたは近隣の普通科高校から配信することを目指す。
- ④ CORE 地域内での単位認定を伴う学校相互型遠隔授業を継続する。

(2) 遠隔教育システムを活用して目指す高知県の教育の姿（目標値）

- ① 中山間の小規模高校や郡部の小規模高校に遠隔授業と補習を配信し、教育格差を縮める。（進路実現率を令和9年度末までに100%にする）

- ② 多様な講師によるキャリア教育講演の配信により進路意識を高める。
(講演参加者の肯定的評価の平均を令和9年度末までに3.6以上にする)

(3) コンソーシアム事業について

次年度以降の取組を検討する中で「幡多・四万十地域生徒発表会」など、生徒の探究活動などの成果発表会の実施について、「探究を深めることが大切だが、発表準備に時間が取られてしまうのではないか」といった課題が挙げられた。また地域産業と学校とでwin-winな取組にするための課題として、取組が学校現場でとどまっている現状をあげて「地域産業とタイアップした取組なども検討していくことが必要ではないか」、「連携・協働できる企業や事業所をリストアップすることができれば、連携を図りやすくなるのではないか」などが挙げられた。これら課題について、作業部会において検討していくこととしている。

「高校魅力化評価システム」については、これまでのアンケートの経年変化や学年による違いなどを、学校ごとの取組に照らしながら読み取ることが大切である。特定の教員だけでなく、さまざまな教員の視点からデータを読み解くことで、学校の取組や、学校を取り巻く環境について検討材料とすることができる。高校魅力化評価システムを活用するための一斉研修会に加え、各学校における研修会も開催し、アンケート結果と各学校の取組や地域の教育環境との関連性を学ぶとともに、生徒の社会性を育むために、何ができるのかを考える機会を多く提供していきたい。